令和小判

内田　満夫

先日友人と呑んだ際、「いいものを見せてやろう」と言って、彼がふところから取り出したものがある。なんとそれは、みごとな山吹色の「小判」だった。

世紀の変わり目に底を打った金価格は、その後じりじりと値を戻していたが、令和に入るや一九八〇年のバブル期ピーク値・グラム六千円台をあっさりと回復。以後はあれよあれよというまに、昨年八月にはついに一万円を超え、なおも上昇中である。

もう二十年も前のことになるが、定年退職時に手にした一時金の運用について思案したことがあった。それまで縁のなかった各種金融商品についても、あらためて研究の必要を感じ、証券アナリスト協会の検定員試験にも挑戦しながら勉強を始めた。

勉強だけでは実感に乏しいので、余裕資金の一部を運用してみることにし、ひととおりの実体験もした。ちょうどバブル後の底打ち時期だったこともあり、最初に着手した株式投資はなんと、一年で倍になった。それで調子に乗り一時は十銘柄近くを保有したが、その後はさっぱりである。他にも金現物、投資信託、外貨投資、ＦＸ（為替証拠金取引）、オプション取引などにも手を出してみた。

しかし所詮は金融素人の戯れ。長期投資の視点が決定的に欠落していて、差益ばかりに目が行き勝ちだった。「損切り」がなかなかできずに、保有がずるずると長引き傷が拡大する。結局、ン百万円儲けてン百万円の損、差し引きトントンの戦績に終わる。

ただ金だけは、一キログラム金塊を数枚、底値付近で買っていたこともあり損はしなかったものの、ほどなく生活上の必要から早くに換金してしまった。まさか買値の十倍にもなるとは思いもしないから、今にしてみれば惜しいことをしたものだ。

冒頭の小判というのは実は、百グラムの金塊である。その友人によると、やはりグラム千円前後の時分に、一キログラム金塊を数枚購入したという。一枚あたり百万円で買ったものが十倍の一千万円になったというわけだ。

一千万円の資産を売却するとなると多額の譲渡益が発生してまちがいなく所得税率がアップする。ひいてはこれが、住民税、医療費負担にまで影響してくるから、つましく暮らす年金生活者としてはかなりの痛手になるのだ。

そのまま保有するのは得策でない。そんな事情を見越してか、貴金属会社が金塊の分割精錬加工のサービスをはじめたのだ。幾ばくかの加工費用を支払えば、一キログラムの金塊が百グラム十枚に分割されて戻ってくる。一枚がちょうど掌に収まる百万円相当の、令和の小判に化けて帰ってくるのである。